

春 の 闇

脚本／北島 淳

原作／Hans Henny Jahnn「DIE NACHT AUS BLEI」



※ 「春の闇」は月のない春の夜の闇を指す季語である。

とき

現代、またはそれに準ずる時間

ところ

闇が覆う、少なくとも非常に光の少ない町

ひと

女1・・・酒場の主人

女2・・・酒場の常連

男1・・・スズキスズオを名乗る女2の元配偶者

男2・・・ヤマダヤマオを名乗る異邦人

〔注〕傍線を引いている部分は、本来発話するべき役のために用意された台詞だが、他の俳優が盗む部分として指定しているところ。盗む前提で別の役の台詞として記載しているが、上演に当たっては本来の役に戻しても一向に構わない。

- ◎ 舞台上にはいくつかのそれぞれ大きさの異なる丸い穴があいている
なお、この作品における暗闇（いわゆる完全暗転）は終幕時のみを想定している

【春の闇】

沈黙

薄明かりの中、軽装の女1がゆっくりと、しかし足取り軽やかに現れる

女1はうろろうとあたりを歩き回った後、ふと立ち止まり、無造作に荷物をおろす

女1 …そうね、ここが良いんじゃないかしら。だって…

女1の後を追って、女2がゆっくりと、随分と重たい足取りで現れる

女2は、およそ女性1人では運ぶことが困難なほどの大荷物を抱えている

つまり、女2は酒場を開くのに必要な道具一式を背負わされているのだ

女1 （女2にかまわず続ける）ここなら光だって十分にありますし、おおよそ幾らだって経ってはいないでしょう。それに…とても静かよ。風の音ひとつ聞こえないくらい。まるで、世界からぼつんと、あるいは…ここが世界のすべてみたい。（穴があいていることに気づき）…
…あれは…穴、かしら…そうね、穴…ね。ええ、すべてだからって、完璧であるとは限らない。ねえ、こちらにいたしましょう？

女2 はあ…。（運ぶことに精いっぱい）

女1 だって、私、

女2 ここが良い

女1 って、そう思ったんです。その、穴だって、よくよく見てみなくっちゃなりませんけれど、上手に使えば、何かお店の足しにすることだってできるかもしれない。

女2 なあに？

女1 ですから、

女2 穴……。ああ、もうだめ。

女2は荷物ごと身を投げ出して倒れる

女1は投げ出された荷物から小さく古臭いラジカセを取り出し、再生ボタンを押す
すると、ラジカセのカセットテープから陽気な音楽が鳴り始める

女1 （大きく手を叩き）さ、開店の準備よ。

女1に促され、女2は女1とともにあわただしく酒場の準備を始める

女2 ねえ、どうして？

女1 なあに？

女2 私たち、今、準備をしているわ。あなたのお店の。

女1 ええ。

女2 私、ひどく重たい荷物を運んできたの。あなたのお店の。

女1 そうね。

女2 ねえ、どうして？

女1 ありがとう。あなたはとても良いお客よ。

女2 ねえ、どうして？

女1 なあに？ さっきから変よ、あなた。

女2 だって、ここはあなたのお店なのよ？

女1 分かっていますよ、そんなことさらに言わなくなったって。ここ、私のお店よ。

女2 なのに常連の私ばかりがあなたのお店の荷物をたくさん運んで。…あなた、いつだってひどく軽い身なりじゃありませんか。

女1 勘違いしちゃいけませんよ。

女2 ……何です？

女1 物事には順序つてのがあるんですから。お忘れになってもらっちゃ困ります。私はこの酒場の主人です。そして、あなたはそのお客なんです。

女2 それこそおかしいわ。だって、

女1 順序

女2 っって仰るなら、ここはそもそもあなたのお店なんだから、やっぱり荷物はあなたが運ぶべきじゃないかしら？

女1 だって、それはあなたが持つてくださるから。

女2 私はあなたのお店の常連ですから、常連として、それはあくまで善意で

女1 (作業を次第にとめながら) ですから

女2 順序

女1 が大事だ、っって申し上げているんです。

女2 …え？

いつの間にか音楽は終わっていて、カセットテープは無音のまま回り続けている

女1 物事は筋道を立てて考えなくっちゃ。大事なことよ。

女2 ……ええ。

女1 だったら、いくらあなたが

女2 (胸を張って) 常連です

女1 なんて胸を張っても、それはあなたがまず私の店のお客だからです。

女2 分かっていますよ、そんなこと。

女1 いいえ、分かっているんです。少なくとも、大事なところはちつとも。

女2 どういうこと？

女1 あなたは常連である前に、あなたはまず私のお店のお客なんです。

女2 ……ええ。

女1 でも、あなたが私のお店のお客になる前から、私はお店を開いています。だからあなたはお客になった。そうじゃありませんか？

女2 ……ええ。

女1 逆から言えば、そもそも私がお店を開いたから初めてあなたもお客になることができて、その結果として常連にだつてもなることができた。それだけの話じゃありませんか？

女2 ……あの…あの、でもね、

女1 私はあなたがいなくなつたつてお店は開いているわ。事実としてそうなんですから…。一方、あなたは私がお店を開かなくっちゃ、常連どころかそれ以前にお客にだつてなれやしないけれど。

女2 ……ええ。

女1はラジカセの停止ボタンを押す

少しの間

女2 あの私、別にあなたに不満があるとか、そういう訳じゃ、

女1 お礼のひとつだつて言っただけよ。

女2 ……なあに？

女1 (ラジカセを口元にあてて録音ボタンを押す) ……常連で、いさせてくれて、ありがとう… (停止ボタンを押す) ……

女2 ……ええ？

女1はラジカセを少しだけ巻き戻す

女2 ……何、それ？

女1は再生ボタンを押して、収録した自分の声を流す

ラジカセ 「常連で、いさせてくれて、ありがとう」（女1が停止ボタンを押す）

女2 ……あ、この度はどうも、と言うか、いつもどうも

女1 （遮るように大きく手を叩き）さ、開店の準備を続けましょう。

2人は再び開店の準備を始める

その途中、2人の動線が重なってしまい、相手が避けた方向に自分も避けるという、よくある気まずい瞬間が訪れ、その刹那、女2は激昂し、女1に組みかかる

女1 何よ？

女2 何よ？

2人はしばらく揉みあい、少し離れて対峙する

女1 だから、ありがとうって、言い

女2 （組みかかる）

女1 何よ？

女2 何よ？

2人はしばらく揉みあう

やがて女1が優勢となり、女2を何度もしばく

女2 いたい、いたい、いたい、いたい…

いつの間にか、疲れ果ててここにたどり着いていた男2が2人のファイトを見ている

男2 あ、お取り込みのところ申し訳ありません。

女1 （しばくのをやめて） ……あら。

女2 ……どなたかしら？

男2 すみません。あの、

女1 ええ。

男2 …こんにちは。

女1 あら？

男2 え？

女2 こんにちは。

男2 え？

女2 え？

男2 あの、……今、

女2 こんにちは、

男2 つて言うのはつまり…やっぱり、夜なんですわ、今は？

女1 …ええ。

女2 おそらく…ですけれど。

男2 おそらく？

女1 それで、何かご用ですか？

男2 いえ、特段の用というのは別に。

女1 そう。

女2 見ない顔ですけど。

男2 え？

女2 どこからいらつしやったの？

男2 …ええ、それは…（来た方を指差して）あちらの方から。

女たちは男2が指差した方向を覗き込むように眺める

男2 すいません。私……ひどく混乱をしていますが……何しろ、このあたりはやけに暗くつて……灯りひとつない。いえ、ここに至るまでいくつか薄ぼんやりとした灯りらしいのはあったんですが、それもすぐに消えてしまった……それに、

女2 あつた

男2 とは言っても、それは本当に光だったのか、それとも、瞼の裏に映り込んだ残像くらいに過ぎないものか、今ではもうどれもこれもこれもが曖昧で、

女1 …ええ。

男2 とにかく……灯りを見つけたんです。ひどく安心したことを覚えています。それを頼りに私はここまで……そうすると、あなた方2人が取っ組み合いのけんかをしていたんです……（ひどく咳込んでしまう）

女たちは再び男2に目を向ける

男2 …すみません。

女1 なぁに？

男2 何しろ、ここまでしばらく歩き通したもので、

女2 なぁに？

男2 あの…ここは？

女2 …ここ？

男2 ええ、あの…あなた方は、何をしていたらっしゃるんです？

女1 …まず、ここは…：酒場です。私の。

男2 酒場…。あなたの？

女1 ええ、ここは…：灯りを求めて開いている酒場です。私が主人で…：それから、彼女は常連です、このお店の。

男2 …なるほど。

女2 次にここは…：酒場なんですよ、彼女の。

男2 え？

女2 そう、ここは…：灯りを求めて開かれる酒場なんです。彼女が主人で…：それから、私は常連なんです。このお店の。

男2 あの、どうしておんなじことを言うんです？

女1 …：おんなじ？

男2 ええ。

女1 どこが？

男2 だって、そうじゃありませんか？

女2 違いますよ。

男2 …何ですって？

女1 何しろ、私たちはそれぞれ違う口を持っているんですから。

女2 口が違えば主語が変わるでしょう？ 少なくとも、その内容が…。それでもあなたが
おんなじだ

女2 っってお感じになるんですしたら、それは私たちが仲良しだっただけのことです。

男2 …どうして？

女1 何しろ違う口から申し上げたことが、あなたの心には同じように映るんですから：第三者の証文が手に入るんです。これは、私と彼女の、いわば愛の証左といって差し支えない。

男2 ええと：つまり、あなた方は……：すごく、仲良しなんですネ、お2人は。

女1 ええ。

女1・女2（バラバラに）私たち、とっても仲が良いんです。

男2 あ、そうでもない。

女2は激昂し、女1に組みかかる

男2 え？

女1 何よ。

女2 何よ、バカア。

男2 あの、すみません。

女2 あなた、早いだよ。

女1 あなたが遅いのよ。

男2 あの、何かいただけませんか？

女たちは争いをやめて、三度（みたび）男2に目を向ける
問

女1 何です？

女2 なあに？

男2 ずいぶん長いこと歩いてきて、喉だつてからからなんです。やっと見つけた明るい場所だ。

…ここは、酒場なんでしょう？

女1 …ええ。

男2 でしたら少し…休ませていただけませんか？…私、ほとんど疲れてしまつて。

女2 ……どう、かしら？

女1 お客様になりたい、ということでもよろしいでしょうか？

男2 ……なりたい？…ええ…はい。いかにもそのとおり。私はお客様になりたい。

女1 では、合言葉をどうぞ。

男2 ……ええ？

女1 ……ですから、

女2 合言葉をどうぞ。

男2 ……合言葉？

女1 仰ったじゃありませんか、

女2 お客様になりたい

女1 っ。

男2 ……あの…そういうシステムなんですか、ここ？

女2 システム？

男2 ですから、その…え、合言葉？

女1 合言葉…あなた、知らないんですか？

女2 知らないんですか、あなた、合言葉？

男2 いえ、私だって合言葉の意味くらいは知っています。ですが、

女1 ではどうぞ。

女2 どうぞ。

男2 ……ええ、と……………(さんざ逡巡の後に) 開け、ゴマ。

女1 山。

男2 え？

女1 山。

男2 ……………川？

女2 豊。

女1 70点です。

男2 何が？

女2 合格おめでとうございます。

女1 いらっしやいませ、こんばんわー。

男2 あの、…今のそうなんですか？

女1 「開け、ゴマ」から「山川豊」への流れるような要素のつながり。加点が付きます。

女2 すごいわ、あなた。初めてで70点なんて。

男2 あ、ありがとうございます。

女1 ええ、何といっても70点ですから……そうね、お酒を頼めばコップが出てきます。

男2 ……中身は？

女1 いえ、中身まではちよっと。

男2 どっちですか？

女2 とにかく、あなたもこれでお客様です。

女1 おめでとうございます。

男2 ……そうですか。……そうだ、あの、申し遅れましたが、私、…ヤマダヤマオと申しま

女1 (舌打ち)

女2 (舌打ち)

男2 え？

女1 いいえ、続けて。

女2 ええ、お客様なんですから。

男2 ……ええ。ですから私、ヤマダヤマオと

女1 (舌打ち)

女2 (舌打ち)

男2 ……どうしました？

女1 いいえ、

女2 何でも。

男2 …………ヤマダヤマオと

女2 (舌打ち)

女1 (唾棄するように舌打ち)

男2 いったい何ですか？

女1 あの、よしてください、お名前なんて。

男2 ……………どういふことですか？

女2 あなた、いくら

女1 お客様だ

女2 つても、ついでにこの際名乗りまであげてしまおうって言うのは、ちょっと虫が好すぎる

女2 んじゃないかしら？

男2 ……どうしてですか？むしろ、こんなに得心のいく話はない。私は、あなた方にお客と認めて
いただいた。ですから、私だつて自分がいったい何者か、それを少しだけ申し述べようと

女1 分からないもの。あなたが

女2 誰？

女1 だなんて、私たち…。

男2 ですから、今、申し上げているんじゃないやありませんか。私の名前はヤマダヤマオと

女2 嘘ばっかり。

男2 嘘じゃありません。

女1 そうそう簡単なことじゃありませんのよ、お名前を名乗るってことは。

男2 ……どうして？

女2 だって、いくらあなたが

男2 ヤマダヤマオさんだー

女2 って主張されたところで、私たちはそれが本当であるかどうか分かりません。

男2 だってそれは私が…私自身をそう思っているんです。それで十分じゃありませんか。デカルトだってそう言っている。

女1 だからって、それを私たちに押し付けることはできませんよ。デカルトだってそう言っています。

男2 ……あ。

女1 あなた、そもそも名乗る必要もないお名前を軽々に名乗ろうって言うんですしたら、それはそれ相応のお示しをいただかなければ…つまりあなたが

男2 ヤマダヤマオさんだー

女1 と私たちが得心するに足る。例えば、ここにあなたの生みの親だったり、市役所の戸籍係の方を連れてきていただけるっていうことでしたら、それだけで十分とは思いますが。

女2 今、お持ちじゃありません？ そういう…親とか、あるいは、市役所の戸籍係。

男2 ……持ってる訳ないですよ。

女1 だったら、私たちだっておいそれとあなたが

女2 ヤマダヤマオさんだー

女1 なんてことを信じる訳にはまいりません。

男2 ……じゃあ、これならどうです。私、こちらに運転免許証を持っています。これを見ればあなた方だって、いくらなんでも認めざるを

女1 名前の違う運転免許証なんて、そこいらの香港マフィアだって持っていますよ。

男2 私はそこいらの香港マフィアじゃありません。

女2 だったら、ちよっとした香港マフィアだったりするのかしら？

男2 え？

女2 よ、極悪人。

男2 違います。

女1 それじゃあ、あなた誰なんです？

男2 だからそれはヤマダ

女2 (舌打ち)

女1 (舌打ち)

男2 ……私、どうすれば良いんです？

女1 あの、何だって良いんですよ、私たち、あなたが

女2 誰？

女1 であつても。

男2 ……何ですつて？

女1 あなた、立派に合言葉をお答えになられたじゃありませんか：70点でしたけれど。

男2 ……ええ。

女2 だったら私と同じ…とつくにお客様です。それで十分じゃありませんか？

男2 ……なるほど。しかし…それでは、何とお呼びすれば良いのか、つまり…あなた(女2)と、…あなた(女1)を。

女2 ほら、今仰った。

男2 え？

女1 そもそも親だとか、祖父母だとかにたまさか付けられただけの名前なんて、生まれてきたつて事実に比べれば、ひどく心もとないものじゃありませんか。

女2 だったら、あなた(女1)と、あなた(自分)。ね、これで十分じゃありませんか。もし、あなたがお望みでしたら、

女1 お前

女2 とか

女1 貴様

女2 とか

女1 何

女2 でも結構ですけれど。

女1 何か特定のお名前でさえなければ。

男2 あなた。

女2 何？

男2 (女1に)あなた。……そう、(女2に)あなた……で、お願いします。

女1 どうぞ。

男2 ……え？

女1 ゆっくりなさつて。お疲れなんでしょう？あなた、そう仰った。

男2 ……ええ、ありがとうございます。

女2 そうね、（地面の大きな穴を指して）その穴、なんてよろしいんじゃないかしら？

女1 ……穴？

男2 穴？（大きな穴へと進みだす）

女2 その穴、へりに座れば椅子にだつてなるし、中にすつぱり座り込んでも結構よ。

男2は立ち止まり、大きな穴をじっと見る

男2 穴……………。

女2 どうぞ。

男2はそのまま、大きな穴の中へと降りてそのへりに腰掛ける

男2 失礼します。

女2 ね？

女1 なるほど……………（中くらいの穴を見て）とすれば、

女2 そつちのはあなたよ。

女1 私の？

女2 こつちの大きいのはお客のもので、そつちの中くらいののはマスターのもの。間を挟むのはマホガニー…て訳にはいかないけれど、でも、立派なカウンターよ。ね、とっても酒場らしくなると思うの。どうぞ、あなたも座ってみて。

女1 ……ええ。（中くらいの穴へ向かう）

女2 あなたはどう？ 座り心地は？

男2 ええ…悪くない。しかし、これではテーブルはありませんね。せつかくの酒場なのに。

女2 私、テーブルのことなんか話しちゃいけないわ。座り心地を聞いているんです。

男2 あ、すいません。とても良いです。

女2 やつぱり。

女1 （中くらいの穴に入つて）こう？

女2 そう。そこはやつぱりあなたの場所よ。

女1 そうかしら…じゃあ、あなたは？

女2 私は、いつもの椅子で十分ですから。（自分が運んできた椅子へと向かい、座る）
女1 （中くらいの穴のへりに腰掛ける）でも、やつぱりちょっと低いかしら。

両手にデカルトの「方法序説」を持った男1が、ぶつぶつとつぶやきながら入ってくる
その足取りは非常に軽やかである

男1 我……思う……ゆえに……ワレーあり…… ※繰り返す

男1は舞台を大きく、縦横にうろついている

女1 あら……。

女2 いらっしやい……。

男1 (かまわず歩き続けている) …ワレーあり。

男1は男2の正面で急に立ち止まる

男1 やー、まいった。長かった自分探しの旅を終えてようやく酒場に伺えると思ったら、もう
あすこには誰もいないんだもの。

女2 私たちだって、さっきついたらばかりですよ。

男1 そうでしたか。見渡してみてもすっきりまっくらで、もう何がどれだか…あそこは明るく
つて、とても良いところだったんですがね。

女1 ここだって静かで良いところですよ。

女2 ええ、例えばカウンターやお客様に椅子だってちゃんとしつらえてあるんですから。

男1 なるほど。そして、何より灯りがある、と。(男2とはじめて視線が合う)

男2 …あ、あの、

男1 おや、これはこれは僕としたことが。

女1 気づいていらっしやったでしょう？

男1 ええ、気づいていましたが、今、初めて気が付いたふりをしました。

女2 お客様ですよ。

男1 そうでしょう。酒場にいるのだから、そこにいるのは客か店の人。そして店の人はあなた
だ。

女1 指を差さないでいただけるかしら。

男2 あの…はじめまして、私、

男1 いただきます。

男2 え？……あの、おかえりな

男1 かける

男2 はい？

男1 ただいま。

男2 ……おかえり

男1 かける

男2 何です？

男1 ただいま。これなーに？

男2 ……クイズですか？

男1 時間切れ、ブー。正解は、ただいま×（かける）ただいま×ただいまで、ただいま参上
（三乗）、スズキスズオでござい

女1 ちよっとよしてください。

男1 あー。

女2 惜しい。

女1 勢いで名乗ったってダメですよ。きちんと証明をしていただかなくちや。

男1 ダメか。

女2 ダメなのか。

男2 あの、こちらの方は？

男1 スズキスズオです。

女1 認めません。

男2 どうも、はじめまして。

男1 ……おや、どこかでお会いしませんでしたか？

男2 え？…いえ、

女1 それで？ その

女2 長かった自分探しの旅

女1 の結果が、先ほどのくだらないクイズなのかしら？

男1 ええ、よくぞ聞いていただきました。

女1 別に聞きたくって聞いてるんじゃないやありません。

男1 （本をかざし）これが何か分かりますか？

女2 それ、なあに？

男1 「方法序説」です。ルネ・デカルトです。いえ、僕はスズキスズオです。

男2 デカルト？

男1 たしかに僕は前の酒場を旅立ちました。その後、偶然道端に落ちていたデカルトをめくり、めぐり会ったんです。デカルト、ご存知ですか？ ご存知じゃありませんでしょう。

女1 (男2に) お願いします。

男2 私？

男1 やはりご存知ないようだ。それでは読んで差し上げましょう。(めくりだし) はい、ではちよっとお待ちください。

女2 頑張ってるね。

男2 ええ？

女1 分かっています？

男2 分かりますけど。

男1 (目当てのページを見つけ) そう、このページ。ここをめくった瞬間の、めくるめくめぐり会い。それはつまり……『エゴ・コギト・エルゴ・スム』……つまり、

男1・男2 我思う、ゆえに我あり。

男1 誰だ、君は。

男2 それ、さつきやっただんです。

男1 ……というと？

男2 まったく同じデカルトの話をしたんです。さつき私が、ここで。

男1 結果は？

男2 ……ダメでした。

女2 認めませんよ。

男1 そうでしたか。ちなみに僕はスズキスズオですが。

女1 認めませんよ。

男2 そうなんです。ところで私はヤマダヤマオなんです。

女2 認めませんよ。

男1 いや、非常に残念です。しかし、今日の僕は一味違いますよ…(パスポートを取り出し) さあ、これならどうですか？ 分かれますね、パスポートです。僕は今日、これを見知らぬ親切な通りすがりの方からお買い上げまして、

男2 それもさつきやっただんです。

男1 え？

男2 パスポートではなく、運転免許証でしたけれど。

男1 結果は？

男2 ……あえなく。

女1 認めませんよ。

男1 そうでしたか。返す返すも残念です。

男2 あと、あなた、騙されていますよ？

男1 誰に？

男2 パスポートってのは発行されるものです。買うもんじゃありません。

男1 ……いや、買えたよ。

女1 あの、もうよろしいかしら？

男1 ……はい？

女1 ですから…全弾、撃ち尽くしました？その、何でしたっけ？

女2 自分探しの旅？

女1 そうそう。そこで見つけた……ご自分？

男1 あの…実はあとひとつ。

女2 まだあるの？

男1 申し訳ない。

女1 じゃあ、仰りたいことがあればさっさと仰っていただけますか、さっさと。

男1 痛み入ります。では、時間もあれですのでさくさく参りましょう。（ポケットから有名なキャラクターの人形を出して）あの、一応名付け親ということで母親を持ってきたんですが…これは**「キャラクター名」なのでやめときましょう。

女2 そうしましょう。

女1 賢明な判断だと思えます。

男1 はい、僕もそう思います。

女2 終わり？

男1 とりあえず用意したものはこれで全てです。

女1 どうも、お疲れさまでした。

男1 ああ、こちらこそお見苦しいものを。

女1 本当に。

女2 どうなさいます。少し、休んでいけますか？

男1 いや…もう…そんな…ええ、お言葉に甘えて。

女1 休みますか？

男1 いけませんか？酒場なのに？

女1 ……いいえ、どうぞ。

女2 (男2の方を) あいにく、ご相席になってしまいますけど。

男1 ええ、ええ、どちらでも結構です。

女1 そうというのは普通、相席されるほうに聞くんですよ。(男2に) どうかしら？

男2 ……ええ、私は

女1 嫌でしたら、お断りされても一向に構いませんけれど。

男1 でも、お断りになったら僕はとても悲しむんですけど。

男2 私はそんな…ええ、結構です。むしろ、喜んで。どうぞ。

男1 (急に押し黙り)……君は？

男2 ……どうか、されましたか？

男1 ……いや……(大きな穴を指差し) よろしいかな？

男2 ……ええ、どうぞ。

男1は異様な様子で男2を見据えたまま、大きな穴のへりに座り、男2と対峙する

男2 ……あ、何か

男1 (手で制する)

沈黙

女2 どうなさったの？

男1 (手で制する)

女1 あなた、黙ってさえいければ男前ね。

男1 (親指を立てて応える)

男2 あ、私が何か？

男1 (手で制する)

沈黙

女2 男前になるために黙ってるの？

男1 (手を振って否定する)

男2 あ、

男1 (手で制する)

沈黙

男 1 君、年は？

男 2 は？

男 1 今、いくつ？

男 2 ……25です。

男 1 やっぱり。

男 2 やっぱり？

男 1 どおりで見たことがあるはずだ。

女 2 だから

女 1 どうなさったの？

男 1 君の話だ。

男 2 私？

女 2 あなた？

男 1 僕は35歳だ。

男 2 それが何か？

男 1 お久しぶり。

男 2 あの…どこかでお会いしたことが

男 1 ありません。

男 2 ありませんよね？

男 1 はじめまして。

男 2 ……ええ、はじめまして。

男 1 しかし、お久しぶり。

男 2 何が？

男 1 よろしいですか？

男 2 だから何が？

女 1 どうぞ。

男 1 ありがとうございます。

男 2 ちょっと。

男 1 君は、10年前の僕だ。

問

男2 え？

男1 よく聞こえなかったかな？ 君は、10年前の僕だ。

問

女1 10年？

男2 ……あの、なんて仰いました？

女2 君は10年前の僕だ。

男1 確かにそう言った。

男2 私が…10年前の…あなた？

男1 そのとおり。

女1 あなた（男1）の10年前が…あなた（男2）？

男1 そうです。

女2 じゃあこれ、1人なの？ 2人なの？

女1 2人でしょ。どう見ても。

女2 でも、

男2 私が…あなた？

男1 分からないか？

男2 分かる訳ないでしょう。

男1 しかし事実だ。

男2 あなた…何なんです？

問

男1 …さあ？

女1 （すかさず）さあ

男2 とは何です？

男1 いや、出会ったばかりの君にそんなことを言われたって

男2 だって、え…10年？

男1 手を出して。

男2 え？

男1 ……にわかに信じ難いのも無理はない。ショックを受ける気持ちも分かる。人間10年も経てば、顔も変われば姿だって……このとおりだ。しかし、（手を出して）手を出してみれば分かる。人の手つてのはそうそう変わるものじゃない。僕の手と君のそれを合わせてみれば、ぴったり同じに重なるはずだ。

男2は、おそろおそろの手を合わせてみる

しかし、手は明らかに男1のほうが大きい

男1はそれに気づき、ひどく狼狽している

女1 大きいわね。

女2 ええ、大きいわね……あの10年後。

男1は平静を装い、ゆっくりと手の先が合うまで手を縮めてこまかす

男1 ほら、同じ手だ。

男2 違う手です。

男1 先つちよが合ってる。

男2 あなたが無理やりあわせたんじゃありませんか。

男1 人間、10年もすれば手だって大きくなる。

男2 そんな理屈が通りますか。

男1 とにかく、君は10年前の僕だ。

男2 違う。私は私です。

男1 そりゃそうだ。

男2 え？

男1 君が君でなかったとすれば、どこに君がいるって言うんだ。君が生まれてからこれまで、君じゃなかった瞬間があるのか。（女1を指して）じゃあ、彼女が君か？

男2 いいかげんにしてください。私が言ってるのはそんなことじゃない。つまり、私があなたを誤らないじゃありませんか。

男1 当たり前だよ、そんなことは。

男2 ……はあ？

女2 え、ごめん。何が正解なの？

男1 君は僕ではない。こんなことは考えるまでもない。

男2 いや、だってそれはあなたが

男1 何しろ、君は、10年という長い月日をかけて僕になったんだ。だから、その年月を重ねていない君は…まったく僕ではない。

男2 ええ…と。

女1 あ、なるほどね。

女2 屁理屈じゃない？

男1 言っておくがね、

男2 何です？

男1 君が僕になろうだなんてのはね…10年早い。

女1 ……当たり前じゃない。

男1 そうなんです。

男2 じゃあ…その、10年がたてば、私もあなたみたいになっちゃいますか？

男1 ……君、そこはそんなにショックを受けなきゃならんことかね？

男2 はい。

男1 君ね、人生の先輩として忠告するが、人はなりたいたいものにはなれないことが多いんだ。

男2 違います。何に

女1 なりたい

男2 とか

女2 なれない

男2 とかじゃあなくて、私は絶対にあなたのような人間になることだけは絶対に嫌なんです、絶対に。

男1 ……君。

女2 ひどい。

女1 ええ、ひどいわ。

男2 すみません。…つい、口が悪くなっちゃって。

男1 なるほど……口が臭い。

男2 いや、臭くありません。

男1 悪いんでしょう、お口が？

男2 ああ、そういう意味ではなくって。

男1 やはり、君は僕だ。

男2 どうしてそうなるんです？

男1 僕の口は内臓から腐っているからもうどうしようもないし、ひどく匂う。君も酒には気をつけた方がよい。(男2に息を吹きかける)

男2 うわ、くさっ。

女1 あ、違いますよ、

男2 (男1を指して) 口が悪い

女1 っていうのは。

男1 え、そうなの？

女2 つまり、他人に対して口汚い言葉を平気で叩きつけることができるんです。

女1 そのとおりです。

男1 なるほど。つまり、君は本当は口じゃなくって心が悪いんだね。

女1 そのとおりです。

男2 違いますよ……うわ、まだ臭い。

男1 君、いよいよ僕じゃないか。

男2 何ですか？

女2 え、何？

男1 だって、僕の性根は腐りきっている。

男2 いや、そんなことを言われましても。

男1 内臓以上だ。

男2 そんなに？…口、すごかったですよ。

女2 そうね。たとえば、もし彼がメロスだったとすれば……ええ、絶対に人のためになんかは走らないわ。

男2 え？

女1 そもそも妹の結婚式になんか出ようとするのかしら、この人？

男2 ひどい。

男1 と言うか、その場合、まず僕は激怒をしない。

男2 …と、なると？

女2 1行で終わるわ。

男1 「メロスは激怒しなかった。」…完。

女1 それじゃあ斜陽館は残らないわね。

男2 私は、どちらかと言えばメロスになりたい方なんです。

男1 ならばよろしい。

女1 なれるの？

男1 いくら君が10年前の僕でも、それは今の君がそうってだけで。君がそのまま10年後に僕になるとは限らない。もちろん、なるかも知れないが。

女2 え、そんなものなの？

男1 君がメロスになる方法は知らないが、僕にならないための方策は至極簡単だ。3日に1度で良い。人の役に立つことをすれば良い。

女1 してこなかったのね、あなたは。

男1 ええ、少しも。

男2 じゃあ、ひとつお伺いしたいんですが。

男1 はい、どうぞ。

男2 10年前に私だったあなたは…あなたに会いましたか？

男1 ……うん？

男2 ですから、10年前のあなたである私が今あなたにお会いしているように、そういう、今のあなたの誰かに会った記憶はありますか、10年前に？

男1 ……ないね。

男2 あ、やっぱりそもそも私は10年前のあなたなんかじゃありません。

男1 それは通用しない。

男2 どうして？

男1 簡単だ。どれだけ疑ってみても（自分を指して）僕自身は決して（男2を指して）僕自身のことを否定することはできない。君はデカルトを読んだんだろう？

男2 あ。

男1 まだ分かっていないようだから言っておこう。君と僕は一方的な関係だ。僕が君であった事実を、君は否定することができない。たとえ、今の君がそれを認めなくともそうだ。さらに関係は不可逆的でもある。…すなわち、君は僕になれるかもしれない。一方、すでに僕は僕であるために、君が僕であっても、僕は君になることはできない。

女2 よしてください。難しい話は女には良く分かりませんから。…それ、幾何学の話？

女1 バカね、哲学の話よ？

男1 いいえ、これはすでに科学の話です。

男2 そんなの…先に言ったもん勝ちじゃないですか？

女1 それはそうよ。

男2 え？

男1 そんなことを君にあらためて言われるまでもない。こういうことは先に理屈をつけて言い切ってしまうばあらかたの趨勢は決まってしまう。

女2 それなら私だって分かります。すごく簡単な話ね。

男1 そう。誰だって知っている。

男2 ……名前はどうなるんです？

男1 名前？

男2 私とあなたじゃ名前が違う。……これをどう説明するんです。あなた、10年前はヤマダヤマオだったなんて、そんなふざけたことはないでしょう？

男1 もちろん、僕は10年前から変わることなくスズキスズオだ。

女1 認めませんよ。

男2 え？

男1 しかして、認められてはいないんだ……僕がスズキであることも…君がヤマダであることも。

女2 認めませんよ。

男1 このとおりだ。今、ここに至って君も僕も……有名の何者でもありやしない。

男2 ……私は。

男1 思い悩むことはない。君の未来は僕によって何一つ拘束されることはないし、僕の過去も君の存在によって変えられるものではないのだから…。

男2 はすっかりふさぎこんでしまう

沈黙

男1 はポケットからタバコを探り、1本取り出して口にくわえる
そのままライターを探しているが、どうやら見つからないようだ

男1 (おそろおそろ) あの、火を持ってやしませんかね？

男2 (顔を上げて) あの…。

男1 あ、はい。すいません。

男2 ……お水。

男1 ……いや、火。

男2 (女1に) お水をいただけませんか？

男1 おい。

女1 なぁに？

男2 ですから、

女2 お水…。

女1 お水？

男2 たしか…お酒を頼めばコップが出てくるんでしたね？

女1 ええ。

男2 だったら、お水をいただけますか？

女2 ああ、ご注文ね？

男1 注文？

男2 そうです。

女2 あなた、ご注文よ。お水を一杯。

女1 …ええ、そうね…ちよつとお待ちください。(慌てた様子で準備に取り掛かる)

男1 あのー、ところで、火は？

女2 ライターだったらありますよ。こっち。

男1 ああ、そりゃあすみません。じゃ、失敬して。

女2 ええ、どうぞ。

男1は大きな穴を出て女2の方へ向かう

男2 …格別な理由は何です？

男1 (立ち止まる) どうしました。

男2 私は、あなたと同じ名無しかもしれません。ですがこうして、このお店のお客としてここに座っています。

男1 …それが？

男2 お水だって注文した。

男1 ええ。

男2 一方あなたは…どうしてそんなにお名前を名乗ろうとなさるんです。だったら、なにか…格別な理由があるんでしょう？

男1 いや、たいしたことじゃないんですが…。

男2 ええ。

男1 僕ね、結婚したいんですよ。

男2 …結婚？

男1 ええ。

男2 それは…どうも、おめでとうございます。

- 男1 ああいや、言葉足らずで申し訳ない。正確には、結婚をしていたんです。
- 男2 していた？
- 男1 しかし、あんまりうまく行かなくてね。
- 男2 そうでしたか。
- 男1 原因は、度重なる浮気です。もちろん、僕の。
- 男2 そうでしょう。
- 男1 とは言え一度は浮世をとものに渡ろうと決意した夫婦です。ヨリを戻したくって、こうして通っています。
- 女1 (引き続きグラスを探しながら) 何を都合の良いことばかり申されるんでしょうね？ 自分で勝手に浮気をしておいて。
- 男1 いや、申し訳ない。
- 男2 と、いうことは……あなたの奥様、っていうのは。(ゆっくりと女1を指し示す)
- 男1 ええ……(女2を示し) 彼女です。
- 男2 あ、そっちですか。
- 女2 どうもー。嫁でーす。
- 男1 お恥ずかしい。
- 男2 あの、それとお名前に何の関係があるんです？
- 女2 私からお願いをしたんです。
- 男2 あなたが？
- 女2 私、嫌なんです。自分の夫を紹介しようってときに、『こちらが私の夫です』。
- 男1 『けれど、名前は分かりません』
- 女2 なんてのは。
- 男2 いや、お気持ちは分かりますけれど。
- 女2 せめて自分のお名前くらいはきちんと名乗ってから、もう一度プロポーズしてほしい。
- 男1 だから、僕は名前を明らかにしなくちゃいけない。
- 男2 じゃあ、あなたはお許しになるんですか？
- 女2 何が？
- 男2 ですから、その……こちらの旦那さんを。だって浮気をなさったんでしょう？
- 女2 許すも許さないも、そもそも、私から夫婦の間のことからについて何かを申し上げたことはありませんよ。ただ、彼が不貞を働いただけなんですから。
- 男1 お恥ずかしい。

女2 それも何度も。
男1 お恥ずかしい。
女2 だから私、確かなものが欲しいんです。
男2 ……それで名前を？
女2 ええ。それがあれば、今度はしっかりと名前を呼ぶことができるような気がして…。
男1 苦労したんですよ。
女2 ええ。あなたのせい。
男1 お恥ずかしい。
男2 ……確かなものを、お求めなんですね？
女2 ……ええ。
男2 それは…名前じゃなくっちゃいけませんか？
男1 はい？
女2 何です？
男2 例えば……思い出、なんてのはどうです？
女2 ………思い出？
女1 何です、さつきから。
男2 ここじゃ、名前だって不確かなんです。お2人は…いずれにしろ一度は夫婦だったんです。
女2 そうであれば、いろんな思い出を持っておいででしょう？
女2 ……ええ。
男1 それは、もう。
男2 例えば何です？
女2 ……そう、ね。例えば…えーと、
男2 思い出してみてください。
男1 最初に出会ったのは……公園？
女2 ええ。
男2 そう。そうです。じゃあ他には？
女2 初めて手をつないだのは、たしか…
男1 映画館。
女2 映画館。
男2 そう。良い感じですよ。さあ、モア・メモリー。
男1 隠れてキスした…

男1・女2（照れながら）夏祭り。

男2 ヒューヒューですよ、ヒューヒュー。はい、次。

女2 楽しかった…

男1・女2（次第に卒業式のように）新婚旅行。

男2 ネクスト。

男1 大きかった、

男1・女2 マーライオン。

男2 シンガポールだ。

女2 白い海。

男1 青い砂浜。

男1・女2 セブ・リゾート。

男2 フィリピンにまで？

男1 僕たち、

女2 私たちは昔、

男1・女2 結婚していました。

男2 さあ、もう一押し。

男1 僕たち、

女2 私たちは、

男1・女2 幸せでした。

男2（激しく拍手を送りながら）オーケーすばらしい。途中、海と砂浜の色があべこべになって
しまいました。がそんなことは大したことじゃない。

男1 …あの、これが何に？

女2 ええ。

男2 ですから。お2人は既に、名前なんか無くともこんなに素敵な記憶を共有しているんです。
だったら、これを頼りにやり直せば良いじゃないやありませんか。

女2 でも、同じことよ。

男1 ええ。

男2 何が？

女2 あなたが仰る

男1 思い出

女2 だって、私たちが執着している

男2 お名前

女2 だって、結局は記憶にしかないんですから。

男1 僕らも君も、同じことを言っている。

男2 ……どうして？

女2 私には…スズキスズオさんと結婚していたって記憶があります。

男1 僕にだって…自分がスズキスズオだって記憶がある。

男2 ……記憶。

女1 (コップを運びながら) 言い尽くされた表現ですけど、

女2 夫婦って言っても、所詮は他人なんです

女1 から、せいぜいできることと言えば、記憶を共有することくらいしかできません。

男1 そんな胡乱なものであれば、せめて確からしいものの中から、裏書の1つや2つくらいは手に入れたい。そうは思いませんか？

男2 それが…名前だって言うんですか？

女2 私たち夫婦の形は……ちょっと極端かも知れませんが。

女1 はい、どうぞ。(空のコップを置く)

男2 え？

女1 お待たせいたしました。ご注文ですよ。

男2 あ…ええ。(コップを手取る)

男1 そうだ。ライター。

女2 あ、こちらね。

男2 (空であることに気づき) あれ？

男1 これはどうも。

女1 嫌だ、吸うんでしたらあっちに行っちゃようだい。

男1 世知辛い世の中じゃありませんか。

男2 あの、ちょっとよろしいですか？

女1 イン。

女1は元いた中くらいの穴(カウンター)の中に飛び込む

男1 ナイスイン。

男2 あの、

女1 インしてみた。

女2 ナイス・インしてみた。

男2 私、お水を頼んだんですが。

女1 ……ええ。

男2 コップが出てきたんです。

女1 ……ええ。

男1 さて。(煙草を吸うために灰皿をとって離れる)

女2 それがどうかされました？

男2 どうしてですか？ コップが出てくるのはお酒を頼んだときだったはずですよ。だからこそ私は

お水を頼んだんです。

女1 あなた、あんまり無茶を言ってもらっちゃ困ります。

男2 あなた方じゃありませんか、

女2 無茶

男2 も苦茶もさつきから押し付けているのは、

女1 ないんですよ、お水なんて。

問

男1は灰皿を置いてタバコに火をつけて吸い出す

男2 ……え？

女1 ないものを出すのは

男1 無茶

女1 でしょうか？

女2 文字のとおりよ。

男1 お茶かお水か、って違いはありますが。

男2 ……ない？

女2 ありません。

女1 私、一度でも申し上げました？

女2 お水がある

女1 なんて。

男2 そう思うでしょう？ だって、酒場なんですから。

女2 あなた、少し決め付けがすぎますよ。

男2 なら：お酒。

女1 何？

男2 お酒を頼めばどうなるんです？

女1 コップを出します。

女2 申し上げたとおりよ。

男2 お酒はあるんですか？

女1 ありません。

男2 あの：ここ：：：何なんですか？

男2は穴の中で立ち上がる

女2 酒場ですよ。

女1 申し上げたとおりよ。

男1 君だってそう言った。

男2 嘘だ。

女1 嘘じゃありません。

男2 そんな酒場があるはずがない。

女2 ありますよ、ここに。

男2 じゃあ、何か飲むものはあるんですか？

女1 ありません。

男2 何でも結構です。食べるものは？

女2 ありません。

女1 お皿とスプーンだったら出せます。

男2 何にもないんですか：おおよそ、人の腹に入るものは。

女1 もう全部、売り切れてしまいました。

男2 …全部？

女2 ええ、随分前に。

女1 いったったかしら：：：ここから3つほど前の酒場よ。最後のグレープフルーツジュースが
売り切れてしまったのは。

男1 あれは4つ前ですよ。3つ前のところはすぐでしたから。

男2 …すぐ？

女1 ええ。すぐ

男2 って、何です？

女2 あら、申し上げなかった？

女1 この場所、別にもとから明るいつてことはないんですよ。ほんのいくらか前には、真っ暗だったはずなんですから。

男2 あの…何を仰っているのか

女2 あなたは、別にここが

男2 酒場だ

女2 って分かっていらした訳じゃありませんでしょう？

男1 明るいところを見つけて来ただけだ。僕だってそうやってここを探した。

女1 私たちも同じなんですよ。明るい場所を見つけて…そこに、酒場を開くんです。

女2 でも消えてしまふんです、しばらくすると。

男2 …何が？

女1 いつときのことなんですよ、明るいのは。

男2 どうして？

女2 分かりません。

女1 ですから、また、灯りを求めて歩くんです。

男1 そして、見つけた場所が酒場になる、と。…そういうことです。

女1 いいえ、するんですよ、酒場に。

男1 ああ、そうでした。

男2 そこに…食べ物がなくとも？

女2 ええ。

男2 …飲み物も？

女1 ありません。

男2 じゃ、どうして酒場なんてやるんです。売り切れなら結構なことだ。商売繁盛。ありがたい店を閉めちまえば良いじゃありませんか。

女1 そうはいきません。夜明けまでは店じまいをしちやいけないんです。

男2 …どうして？

女2 さあ…。

男2 さあ？

女1 分かりません…でも、そういうしきたりになっているんです。

男2 しきたり？

男1 夜が長いんです、この町は。

男2 …長い？

女1 ええ…どんどん長くなっています。もう…前に夜でなかったときのこの町のことなんて、まるでいつだったか分からないくらい。

男2 ……この町。

女2 一方、灯りのある時間はまちまちよ。長かったり、短かったり。

男1 つまり、こういうことです。(タバコを消す) 一つの灯りが消える、すると…どこか別の場所に灯りがともる(新しいタバコに火をつける)……これの繰り返しだ、少なくともこの長い夜の間は。

女1 それは、あなたが仰ってるだけの仮説でしょう？

男1 だって実際にそうなんです。何しろ、この酒場を離れて灯りを見たことなんて一度もない。

女1 おかしいわ。立証のない仮説をありがたがるなんて。

男1 しかしね、反証のない仮説というのは、事実でなかったにせよ少なくとも真実です。

女2 だから難しい話はよしてちょうだい。さっきから、幾何学のお話ばかり。

女1 違います。科学の話よ。

男1 違います。哲学のお話です。

男2 あなた方、いったい何の話をされているんです？

女2 哲学の話だそうよ。

男1 いいえ、科学の話だそうです。

女1 そもそもは、この町の話です。

女2 この町の夜、のお話じゃなかったかしら？

男1 夜ではない。灯りの話だ。

女1 酒場の話、じゃありませんでした？

女2 でもこのお方、コップとかお水とかお酒とか仰ってましたよ。

男1 まあ、どれにしろ、幾何学のお話じゃありません。

女1 そうね、それだけは間違いありません。

女2 どうして？ 幾何学は何にでも効くのよ。半分はやさしさよ。

男1 あなた、正露丸とバファリンと幾何学がぐちゃぐちゃだ。

女1 それで、いったい何の話？

男2 私の話をしていただけませんか？

女1 あなた、だあれ？

沈黙

男1は、タバコの火を消す

男2 私は……………生まれも育ちも…ヤマダヤマオと申します。

女2 (舌打ち①) ※ この後男2の台詞まで、台詞は1秒ごとに切り出す

女1 (舌打ち②)

男1 (舌打ち③)

男1・女2 (舌打ち④)

男1・女1・女2 (舌打ち⑤)

女1 (舌打ち⑥)

女2 プツ。

男1・女2 プツ。

男1・女1 プツ。

女2 ポーン。

男1 (舌打ち①)

女2 ただいまより、夜、を、お知らせします。

女1 (かまわず「た」の1秒後に舌打ち②)

男1 (舌打ち③)

女1 (舌打ち④)

男1・女1 (舌打ち⑤)

女2 (舌打ち⑥)

男1 プツ。

男1・女1・女2 プツ。

女2 プツ。

女1 ポーン。

男1・女1・女2 ただいまより、夜、を、お知らせします。

男2 (ひとりで舌打ちを続ける。最初は聞こえないくらい小さく、やがて大きく)

男2の舌打ちだけが響き、やがてパタリとやみ、沈黙する

女1 あら…もうこんなに暗い。

女2 本当。

男1 やっぱり…だんだん短くなってやしませんか？

女1 そうかしら？

男1 ええ…ま、これも裏づけはひとつもありませんが。

女1 フフ…（男2に）ねえ、あなた、どうなさるんです？

男2 ……どうしてそんなことを聞くんです？

女1 あんまり時間がないんです。ほら、もうこんなに暗くなってしまつて。

男2 ……時間？

女2 あなたみたいに灯りを求めてこの酒場にいらつしやる方なんて、ごく僅かしかいないですよ、この町では。

女1 私たちは…もうじきにここを離れなければなりません。次の酒場を開くために……ですか。もし、あなたもこちらを離れるんですたら、道中はどうあれ、結局は私たちとおなじところへ行き着くことになるんです。そうであれば、あなたはあなたについて、早々に態度を明らかにしていただかなければ。それともこのままここで、真っ暗になるまでお待ちになりますか？

男2 ……私は

女2 だあれ？

男2 ……私は。

男1 ま、急いても仕方がありません。1つずつ順番に整理をしてみましょう。まず……君は誰だ？

男2 ………ですから私は

女2 ヤマダヤマオデス… ※ そのまま「ー」を伸ばす

女1 （重ねて、低く）スー… ※ そのまま「ー」を伸ばして、女2と同時にやめる

女2 ……聞きましたよ、何遍も。

女1 その度に、私たちきちんと否定をしてきたじゃありませんか。

男1 せめて、新しい証拠くらいは掴んでから言うもんです、そんなことは。

女1 あなたみたいに？

男1 そう、僕みたいに。

女1 じゃ、無駄な努力ね。

男1 （ふくれる）

女2 順番に整理しましょう……次は？

男2 ……私は
女1 お客様よ、私の酒場の。
男1 そのとおりで。お水だって注文した。
女2 それに、思い出へのこだわりがあります。
男1 なるほど。あなたは思い出にとっても明るい。
男2 違います。
男1 ……明るくない？
男2 私には…お水は出されなかった。
女1 ……ええ。
男2 ですから…お客じゃありません。
女2 別に注文なんてしなくてもお客様にはなれますよ。私だってそうなんですから。
女1 あなたは常連よ。お客様じゃないわ。
男1 どこが違うんです？
女1 常連ですから、「様」は付きません。
男1 それが？
女1 私、あなたに「様」を付けて呼ぶのは嫌なの、すごく。
女2 何よ。
女1 何よ、やるの？
女2 やらないの。
男2 お客様っていうのは…お水のひとつくらい出されなくっちゃいけません。
女1 ……あら、そう？
男2 ええ。だから私は…私は、お客なんかじゃない。
女2 (男2の「い」に併せて) イー… ※ 続ける
男1 (重ねて、高く) イー… ※ 続ける
女1 (重ねて、高く) ヒー… ※ 続ける
女2 (「ー」を止めて、重ねて) ダ・レ・ダ・レ・ダ・レ・ダ
男1・女1・女2 (男1と女1は「ー」を止めて) ダ
女2 レダ。

少しの沈黙

女1 ……せっかくお越しいただいたのに…残念ね。
男2 ……ええ……残念です。
女1 順番に整理しましょう。…次は？
男1 君は、10年前の僕だ。
男2 ……違います。
男1 ……さつきも言ったが、こういうことは
女2 先に言い切ってしまう
男1 つてことが肝要だ。これであらかた
男2 後で言い切ってしまうようになります？
女1 ……何？
男2 私は…10年前のあなたなんかじゃありません。後でも言い切ってしまうようになります？
女2 ……堂々巡りよ。
男1 ええ…君がそう言い切ってしまう度に、僕も言い切り返さざるを得ない。何度だつて主張しよう、
女1 君は、10年前の僕だ
男1 と。
男2 私は、あなたじゃない。
男1 君は僕だ。
男2 違います。
女1 (男2の「す」に併せて、高く) スッ
女2 (低く) スー… ※ 続ける
男1 (重ねて、高いところから上げ下げしながら) スーウーウー… ※ 続ける
女1 (重ねて、高く) スッ、スー… ※ 続ける
女2 (「ー」を止めて、重ねて) ちがいま
男1・女1 (「ー」を止める)
女2 (前から続けて) スー… ※ 続ける
女1 (重ねて、低く) スー… ※ 続ける
男1 (重ねて) ちがいま
女1・女2 (「ー」を止める)
男1・女1 スッ、(ばらばらに) スー… ※ 続ける

女2 (重ねて) ヨ・ル・ヨ・ル・ヨ・ル・スー… ※続ける

男1 (「ー」を止めて、重ねて、低く) ヨ・スー… ※続ける

女1 (「ー」を止めて、重ねて、高く) ル・スー… ※続ける

女2 (「ー」を止めて、強く) を!

男1・女1 (「ー」を止める)

女2 お知らせします。

女1 結局あなた、誰なんです?

沈黙

男2 私は、

女2 お客じやありません。

女1 聞きましたよ。

男1 10年前のあなたでもありません。

女1 聞きましたよ。

男2 私は…。

女1 あなたのお話をしてください。

沈黙

男2 ……私は…暗い道を1人で歩いてここまで来たんです。

男1 (男2の「す」に併せて、低く) スー… ※続ける

男2 どれだけ歩いたのか…とにかく、ひどく心細くって。

女1 (男2の「て」の後に、手を叩いて、高く) テッ。

男1 (「ー」を止める)

男2 そんなとき

女2 トキトキトキトキトキトキトキトキトキトキ (だんだんフェードアウト)

男2 灯りを見つけたんです。

男1 (男2の「す」に併せて、低く) スー… ※続ける

男2 この酒場の。

女1 (男2の「の」に併せて、高く) ノー… ※続ける

男2 ひどく安心したことを覚えている。

女2 (男2の「る」に併せて、高く) ルー… ※ 続ける

男2 ……タバコをください。

男1・女1・女2 (「」を止める)

沈黙

男1 (怒りを湛えて) ……タバコ?

男2 ……ええ。

男1は、灰皿を持ってゆっくりと男2の方へ向かう

男2の前に乱暴に灰皿を置き、タバコとライターを投げ捨てるように渡す

男2 ……ありがとうございます。

男2はタバコをくわえ、ライターで火をつけようとする

しかし、ライターのガスは切れており、火花を飛ばすばかりで一向に火はつかない

男2は何度も火をつけようとライターを操作する

しびれを切らした男2はライターを投げ捨て、落ちるように座り込む

女たちは、それを見て荷造りをはじめ

男1がひどく小さな声で男2に声をかける

男1 ……君は否定をしたが…君はやはりこの酒場の客で…10年前の僕だ。…しかし、もう声を荒らげて反論する必要はない。…もうじき…灯りはなくなつて…しまう。…僕たちは次の場所へと旅立つが、僕たちが去つた後…君は畢竟、客ではなくなる。…僕もいなくなるから、もう君は僕でもない…ただのがらんだ。闇と君とを分かたつ稜線もなくなる。連いてきたければ良い。君はそのうち…きつと、誰かになる…同時に…君だけになれはしないけれど…コップは…回収しておこう。

男1は男2のコップを回収し、すっかり旅立ちの準備を終えた女たちの元へ合流する

男2が、いつの間にか声にならないような音を出している

それに気づいた3人は、男2に向かって聞き耳を立てる

しばらくして、男2を残して3人は順に旅立ってしまう

男2の音だけが響いている

溶暗

男2の音だけが響いており、やがて、なくなる

『春の闇』

【参考文献】

『方法序説』ルネ・デカルト
『走れメロス』太宰治

幕